

『牧歌』 Bucolica 管見 —その1—

O anima cortese mantoana

やさしきマントヴァの魂よ—ダンテ⁽¹⁾

野村圭介

I

二十世紀ドイツ最大のロマニスト E. R. クルティウスが、生涯を通して最も尊重しかつ愛した詩人は、ダンテと並んでウェルギリウスであろう。『ヨーロッパ文学評論集』 Kritische Essays zur Europäischen Literatur 所収の、ウェルギリウス生誕二千年を言祝ことほいだ珠玉のエッセイをはじめとして、クルティウスは折にふれしばしばこの古代ローマの詩人に言及しているが、そのいずれもが深い敬愛の念に満ちている。例えば初めて『牧歌』をひもといた時のことを回想し、「やがて一つの詩句に行き当たったが、それはこれまで知らなかった幸福感で私の心を充たした。

Mille meae Siculis errant in montibus agnae

我が千頭の羊たちはシチリアの山々を放浪さすらい行く。

この言葉は魔法のように私の心を感動させた。当時はまだ一度もイタリアに

行ったことがなかったが、不意に南国の風景が眼前に広がった。山々、羊の群れ、海の深い紺碧に向って開ける展望⁽²⁾。

さてクルティウスは記念碑的とも言われる大著『ヨーロッパ文学とラテン中世』Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter の中でこんな風に述べている。『アエネーイス』Aeneis だけを読んでウェルギリウスを知ったとは言えない、『牧歌』の後世への影響は叙事詩に比べていささかも劣るものではない。帝政ローマ期からゲートの時代にいたるまで「すべてのラテン的教養 alle lateinische Bildung は『牧歌』第一歌を読むことで始まった。このささやかな詩をそらんじていない者には、ヨーロッパの文学的伝統への一つの鍵が欠けている、といっても過言ではない。⁽³⁾」第一歌は、牧人メリボエウスとティテュルスの対話からなる83行の叙情詩である。その冒頭の5行、

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi
silvestrem tenui musam meditaris avena:
nos patriae finis et dulcia linquimus arva.
nos patriam fugimus: tu, Tityre, lentus in umbra
formosam resonare doces Amaryllida silvas.

ティテュルス、君は枝を上げたブナの木陰に身を横たえ、
か細い葦笛で森の調べを奏^{かな}でているんだね。

ぼくらは故里にいとしい田園に別れを告げる。

ぼくらは故郷^{くに}を追われる。ティテュルス、君は木陰に憩い
森に教えている「美しいアマリュリス」と木魂を響かせるように。⁽⁴⁾

一篇の詩篇にあって書き起こしの詩行が特別に重要な意味を担うのは当然のことであるが、これは近代よりも古代の詩に於いてより著しいものであったように思える。篇首は特権的な位置なのだ。例えば余りにも名高い『イリアス』の

出だし、「怒りを歌え、女神よ、ペレウスの子アキレウスの—アカイア勢に数知れぬ苦難をもたらし、あまた勇士らの^{たけ}猛き魂を冥府の^{アイデス}王に投げ与え、その^{なき}亡骸は群がる野犬野鳥の^{くら}啖うにまかせたかの呪うべき怒りを。⁽⁵⁾」あるいは『オデュッセイア』、「ムーサよ、わたくしにかの男の物語をして下され、トロイアの聖なる城を^{ほみ}屠った後、ここかしこと流浪の旅に明け暮れた、かの機略縦横なる男の物語を。⁽⁶⁾」両篇共に、主役・主題をあたかも掌を指すがごとくきっぱりと揭示する。ウェルギリウスにあっても事情は変わらない。『農耕詩』Georgicaの最初の数行で、詩人は四部からなる作品のあらましを簡潔に要約して歌い、全詩篇への眺望を与えてみせる。

Quid faciat laetas segetes, quo sidere terram
vertere, Maecenas, ulmisque adiungere vites
conveniat, quae cura boum, qui cultus habendo
sit pecori, apibus quanta experientia parcis,
hinc canere incipiam.

何が穀物を豊に実らせ、いかなる星のもとで土地を
耕し、葡萄をニレの木に^{ゆわ}結えばよいのか、
マエケナスよ、牛にはどのような心配りが、家畜にはどうした
世話が、つましい蜜蜂にはどれほどの経験がいるのか、
そうした事を私はこれから歌おう。

さらに『アエネーイス』の人口に膾炙した語り出しについては、改めて言をなすまでもないだろう。

Arma virumque cano, Troiae qui primus ob oris
Italiam fato profugus Laviniaque venit

litora, multum ille et terris iactatus et alto

戦^{いくさ}と勇士を私は歌う。トロイアの岸から運命に導かれて

落ちのび、初めてイタリアのラウィーニウムの岸辺に着いた、

陸でも海でも多くの苦難を忍んだ勇士を。

問題はしかし『牧歌』である。先に引用した、ティテュルスへの呼びかけで始まる五行は、後の農耕教訓詩や叙事詩ほどにはあからさまに作品のテーマを打ち出してはいないように見える。とはいえ R. コルマン Coleman 言う所の、ラテン文学の最も精妙なこの五行 five of the most exquisite lines in Latin literature⁽⁷⁾は、より微妙で含みのある形で、より情趣豊かに、楽園とその喪失、アルカディアと反アルカディア世界という主題を歌い上げているのである。いうまでもなく、五行は単に第一歌の頭に置かれているのではない。それは、各々独立した十篇からなる詩集『牧歌』の劈頭を飾る詩行でもあるのだ。それは『牧歌』全篇への導入部なのだ。以下私はこの冒頭の数行を手がかりとしながら、ウェルギリウスの牧歌世界に少々わけ入ってみたい。筆者の意図は、星の数ほどもある第一歌論に屋上屋を架することではない。劈頭登場する、語り手のメリポエウス、その友人のティテュルス、さらにはアマリュリス等の人物、またブナの木 *fagus* や陰 *umbra* といった事物、これらを『牧歌』十篇の中にとき放ち、その複雑微妙な対立乃至照応^{ないし}関係をさぐりながら、詩人の事細やかな手^{こと}遣い、周到な心くばりをいささかなりともかいま見たいと思うのである。

II

ティテュルス

プブリウス・ウェルギリウス・マロ *Publius Vergilius Maro* は、紀元前70年に北イタリアのマントゥア（現在のマントヴァ）にほど近い農村アンデスで生

まれ、近郊の町クレモナで最初の教育を受けた。長じて詩人は次のように歌う。

Mantua vae miserae nimium vicina Cremonae

ああ不幸なクレモナに余りにも近いマントゥアよ

この詩句を含む第九歌並びに一歌の背景には重い歴史的事実がある。当時のローマは共和制末期の激しい内乱の時代である。前44年にユリウス・カエサルの暗殺。その二年後、ピリッピの戦いで共和政派を打破った後の皇帝アウグストゥスのオクタウィアヌスとアントニウス等は、退役兵に定住地を与えるために土地没収を強行した。接収はイタリア全土に及んだが、とりわけ北部のクレモナ、マントゥア周辺で多くの農地が被害を蒙った。ウェルギリウス自身も同じ不幸に遭遇したが、幸運にも有力者達の仲介により、辛うじて自身の土地を保つことが出来た、と言われている。

第一歌の、幸いにして土地没収を免れのんびりと田園の閑暇を享受するティテュルス、一方安住の地を奪われ泣く泣く故郷を立去るメリポエウス。詩は対称的な二人の牧人の運命を、あふれんばかりの詩情をもって、時に痛切に、またしみじみと歌い上げるのだが、改めてその滑り出しを、

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi

ティテュルス、君は枝を上げたブナの木陰に身を横たえ

ティテュルス、第一歌第一行目の突端^{とっばな}、それはとりもなおさず詩集『牧歌』の劈頭ということだが、その特別な位置に置かれたこの名前には、作者のことさらな想いが込められているに違いない。事実詩人は後年『農耕詩』第四部の末尾で往時を回想しながら、ティテュルスの名一つでもって『牧歌』十篇を代表させている。

illo Vergilium me tempore dulcis alebat
 Parthenope studiis florentem ignobilis oti,
 carmina qui lusi pastorum audaxque iuventa,
 Tityre, te patulae cecini sub tegmine fagi.
 その頃私ウエルギリウスは美しいパルテノペの地に養われ、
 つつましい閑暇を心ゆくまで楽しみつつ、
 たわむれに牧人の調べを奏で、若さに逸^{はや}立ち
 ティテュルスよ、枝を上げたブナの木陰に、とお前を歌った。

『牧歌』に登場する他の数々の人名同様、ティテュルスもまたテオクリトスの『エイデュツリア』に由来する。もっともウエルギリウスが範と仰いだシチリアの詩人にあっては、彼は、ほんの少し顔を見せるだけの、さえない端役にしか過ぎないのだが。W.クラウゼン Clausen は、ウエルギリウスはテオクリトスの牧人名を利用開発 exploit する傾向があると言い、これ以外にアマリュリス、ダモエタス、メナルカス等の名を挙げている。⁽⁸⁾J.ペレ Perret は、ティテュルスというのは本名というよりむしろ綽名 ^{あだな}sobriquet ではないかと言うが、⁽⁹⁾これは古注セルウィウスの「ティテュルスはラコニア（スパルタ）人の言葉で群を先導する年長の雄羊 aries maior を指す」⁽¹⁰⁾やティテュロス *Τίτυρος* は半神半獣の森の精であるサチュロス *σάτυρος* のシノニムであるといった考究⁽¹¹⁾によってのことであろうか。また、R.ハンター Hunter は『エイデュツリア』の注釈で、この名をカラモス *κάλαμος* 即ち葦や笛と解する向きもあった、とも注している。⁽¹²⁾

さて我々のティテュルスは、大きく枝を上げたブナの木蔭にくつろいで森の調べを奏でている。混乱の世にあってそれは、不仕合わせな友メリボエウスが「うらやましいというより、むしろ驚く」non equidem invideo, miror magis 例

外的な境遇。「田園は到る所これほどにも荒れているのに」 *undique totis usque adeo turbatur agris*, 「幸せな老人よ」 *fortunate senex*, と逆境の友は呼びかける。仕合わせと不仕合わせ, 運不運, ポジティブとネガティブ。しかし, 詩人がこれらのどちらかに一方的に加担することはない。そういうことはまずありえない。禍福はあぎなえる縄のごとく, 花咲けば嵐が見舞い, 捨てる神あればまた拾う神がある。微妙に明暗をないませた, 陰影豊かな含蓄の筆づかいを見てほしい。

Fortunate senex! ergo tua rura manebunt.

et tibi magna satis, quamvis lapis omnia nudus

limosoque palus obducatur pascua iunco.

幸せな老人よ！ 君の土地は手つかず残るだろう。

君にはそれで十分だ, たとえむきだしの石や

泥に汚れたいぐさ藺草の沼で一面まきば牧場がおおわれていようとも。

何となく心に触れて忘れ難いくだりだが, アンドレ・ジッドもこの詩句が妙に気にかかるのか, 小説『パリュード』で原文のままこれを引用している。⁽¹³⁾まずは良い巡り合わせの初老の牧人の, 裸の石ころだらけのまきば牧場は, この箇所(1, 46~48)に先行する, 追い立てを食ったメリポエウスの雌山羊がその上で双子を死産した「裸の岩石」 *nuda silex* (1, 14~15) と遠く呼応するものがあるように感じる。

ボードレールは “*Moesta et Errabunda*” (悲シミサマヨウ女) というラテン語のタイトルを冠した詩で, 海を, 私たちの労苦をなぐさめる「しわがれ声の歌い手」 *rauque chanteuse* と言うが, 牧人がこよなく好きなのは,

nec tamen interea raucae, tua cura, palumbes

nec gemere aëria cessabit turtur ab ulmo.

けれど変らず、君の大好きなジュズカケバトはしわがれ声をあげ、
高くそびえた^{にれ}榦の木からは、ナゲキバトがいつまでも鳴きやまないだろう。

とまれ好運な、満足気なティテュルスではある。ところで、『牧歌』十篇を一読して目に立つ特徴は、同一名の各篇への再、さらには再々登場である。第一歌冒頭の三名以外にも、例えばコリュドン（2，5，7歌）、ダモエタス（2，3，5歌）、ダプニス（2，3，5，7，8，9歌）、メナルカス（2，3，5，9，10歌）等々といった名がくり返し頻繁に顔を出すのだ。果して各篇の彼等が同一人物なのかどうか、どうも定かではない。その様に思える時もあり、少々無理をすればそう見えなくもない場合もある。また偶々^{たまたま}同じ名前を冠しているが、別人物だと考えざるを得ないケースもままある。しかし同一名をいただくからには、そこに何らかの作者の意図が、思惑がひそんでいると考えるべきであろう。

第三歌に我々の主人公は再登場する。

Tityre, coge pecus

ティテュルス、羊を集めろ

メナルカスからこう命令された彼は、ダモエタスが歌う二行詩の中でまた、

Tityre, pascentis a flumine reice capellas

ティテュルス、草を食んでいる山羊たちを川から遠ざけろ

と命じられる。彼は、歌合戦で張り合うメナルカスとダモエタスの二人の牧人から、あたかも往復ビンタを食うかのようにピシッ、ピシッと命を下されるの

である。もっともこの第三歌の二つのティテュルスにしても、果して同一人物であるかどうか、はなはだ疑わしいのではあるが。それはともかく、ここでの彼は、牧人につかえる下僕である。いささか粗暴な扱いを受けて一寸気の毒な気がしないでもなく、また第一歌の安穩無事な彼が、その自足と怠情を叱咤されているような気味合がなくもない。『牧歌』各篇の制作年代についてはいまだ定説がないが、少なくとも第二におよび三歌は一歌よりもかなり以前の作であることは間違いない。とすれば、この従僕ティテュルスは、幸せな老人の若い頃の姿と解すべきなのだろうか。そうかもしれぬ。しかし、よくわからない。

第五歌で一瞬顔を出すティテュルスの役廻りは、やはり山羊の群の見張り役、さらに九歌のリュキダスが歌う詩の中で、

Tityre, dum redeo — brevis est via — pasce capellas,

et potum pastas age, Tityre, et inter agendum

occursare capro — cornu ferit ille — caveto.

ティテュルス、僕が戻るまで（すぐそこなんだ）牝山羊たちに草を食わせてやってくれ、

そして腹がくちくなくなったら、水を飲みに入れていってくれ。

ティテュルス気をつけろ、雄山羊に出くわさないようにな、あいつは角で突っつくから。

ティテュルスはまるで下僕の代名詞のようではないか。下働きばかりでは可哀そうではないか。作者は、幾分かは自らに擬せられなくもない第一歌の思わぬ僥倖にありついたティテュルスに、何かうしろめたい気持ちがあって、こんな風にバランスを取っているのだろうか、そんな気がしないでもない。

同じ卑しい身分ながら第八歌の彼は、いささか様子が違う。八歌のダモンは恋人の心変りを嘆く余り、全てが狂えばよいのだ、狼が羊から逃げ、柏かしわの木に

リングが実ればよいのだと歌いつつ、

Certent et cyncis ululae, sit Tityrus Orpheus,

Orphers in silvis, inter delphinas Arion.

^{ふくろう}梟が白鳥と声を競い、ティテュルスがオルペウスに、
森に住むオルペウスに、^{いるか}海豚と共に泳ぐアリオンになれ。

不可能事を並べたてる修辞法アデュナトン adynaton の中ながら、ティテュルスを伝説的な歌と豎琴の名人オルペウス並びにアリオンと並置した詩人に、筆者はティテュルスへのあたたかい情愛を感じるのであるが、如何？

さらに一層興味深いのは、第六歌のイントロダクションで、作者ウエルギリウスが自身をティテュルスの名をもって呼ぶくだりである。

cum canerem reges et proelia, Cynthius aurem

vellit et admonuit: 'pastorem, Tityre, pinguis

pascere oportet ovis, deduetum dicere carmen.'

私が王と戦^{いくさ}を歌おうとすると、キュントスの神アポロン様が
私の耳をつねってこうおっしゃった「ティテュルス、羊飼いの仕事は
羊を肥^{うた}らせること、詩歌はつましいものがよい」と。

何ともしゃれているではないか。^{いき}粹ではないか、面白いじゃないか。よかった、詩人はティテュルスがやはり好きなのだ。ティテュルスが、大好きなのだ。

III

メリボエウス

メリボエウスとは、*μέλω* 世話する *βοῦς* 牛、ということであろうが、そのギリシャ語風の名前にもかかわらず、これはウエルギリウスの創作と思われる。少くとも範としたテオクリトスには登場しない。彼が第一歌で牛飼いの牧人ではなく、山羊飼いであるのも面白いが、

ite meae felix quondam pecus, ite capellae.
 non ego vos posthac viridi proiectus in antro
 dumusa pendere procul de rupe videbo;
 carmina nulla canam; non me pascente, capellae,
 florentem cytisum et salices carpetis amaras.

行け山羊たちよ、行け、かつては幸せだったわが群よ。

もはやこの先再び緑の洞窟に寝そべりながら遠く、

イバラの崖にすがりついたお前たちを眺めることはないだろう。

僕はもう歌はない、山羊たちよ、もはや僕に導かれてお前たちは、

花の咲いた^{うまごやし}苜蓿も苦い柳も食べることはないだろう。

まさしく絶唱という語にふさわしい一節。メリボエウスは、non ego ... carmina nulla ... non と、牧歌的世界への決別を、帰らぬ昔の幸福を、否定辞を三度くり返しながらか、パテティックにまた余韻^{じょうじょう} 嫋嫋と歌い上げる。失われた楽園の象徴である「緑の洞窟」という美しいイメージは、再び筆者に先に引用した“Moesta et Errabunda”（メリボエウスはさしずめ moestus et errabundus）を思い起こさせる。ボードレールは「御身はなんと遠いのだろう、香り

高い樂園よ！」 Comme vous êtes loin, paradis parfumé! とくり返し歌い、その「緑の樂園」 le vert paradis, 「無邪気な樂園」 l'innocent paradis は、「もうすでにインドよりもシナよりも遠いのか？」 Est-il déjà plus loin que l'Inde et que la Chine? と嘆くのである。¹⁴⁾

土地を奪われ、山羊たちに別れを告げてあてどない漂泊の旅へと立つ友に、ティテュルスは一歌の最後でこう呼びかける。

Hic tamen hanc mecum poteris requiescere noctem
fronde super viridi: sunt nobis mitia poma,
castanae molles et pressi copia lactis.

せめて今夜はここで僕と共に、緑の木の葉の上で
休んでいけばよいのに。熟れた果物もある、
やわらかい栗も、搾りたてのチーズだってたっぷり。

旅人はこの申し出を受け入れたのだろうか。二人の友は、しみじみと別離の杯をくみ交したのであろうか。それはわからない。第一歌は日の暮れと共に閉じられる。孤影悄然と一体どこに姿を隠したのか、杳としてその行方は知れない。ところが、第三歌まで読み進めて、「おや」と読者は軽い驚きに打たれる。

Dic mihi, Damoeta, cuium pecus? an Meliboei?

やあ、ダモエタス、それは誰の羊たち？ メリボエウスの？

一行目にいきなりメリボエウスの名がでてくるのだ。何んだまだこんな所にいたのか。幸運の女神がようやく彼にもほほ笑んでくれたのだろうか。羊を飼っているらしい（一行目の pecus を受けて三行目に oves), 以前はたしか山羊のはずだったが。とするとこのメリボエウスは、第一歌の同名の牧人とは別人な

ののだろうか。そうかもしれない。でも羊と山羊の違いだけでそう断定するのもいかななものか？ 三歌の制作年代は明らかに一歌以前、とするとこの羊飼いは、土地没収の憂き目に会う前の彼のことだろうか。しかし我々読者は、個々の作品がいつ何時なんどきの制作に係わるのか、いちいちそんな事を気にはしてはいられない。いずれにしろ一旦目路から去った流浪の人を一瞬再び認めて、いささかほっとするのである。もっとも文字通りほんの一瞬である。たった一度きりその名を呼ばただけで、『牧歌』十篇中最も長い111行の詩の中に再び彼が姿を見せることはない。

第三歌と並んで第七歌は典型的な歌合戦を扱うものだが、その形式が一寸と目新しい。メリボエウスなる牧人が、たまたま立ち会った二人の若者の歌競べを、後年思い出して物語るのであるが、その序の部分が中々に面白い。季節は春の終り頃であろうか、遅霜おそしもに備えて牧人が天人花ミルラに霜除けを施している間に、群のボス山羊が、どこかにふらふらと行ってしまふ。と、ふと仲間のダブニスを見かけると向うも気づいて、

'huc ades, o Meliboee; caper tibi salvus et haedi;

et si quid cessare potes, requiesce sub umbra.

huc ipsi potum venient per prata iuveni;

hic viridis tenera praetexit harundine ripas

Mincius, eque sacra resonant examina querqu.'

「おーい、メリボエウス、早くこっちに来いよ、

君の山羊は心配ないよ、小山羊らもな、

もし少し手がぬけるなら、木蔭で一息入れたまえ。

子牛たちも草原くさはらを越えて勝手にここまで水を飲みに来るさ、

ここは、やわらかな葦がミンキウス川の緑の岸ふちを縁取り、

聖なる檜の木からは、蜜蜂の羽音もひびいてくる。」

『牧歌』には、余韻豊かに心を捉えて離さない詩句がここかしこに散見され、真の詩人なるかな！と、しばしば感嘆これを久しくする。このくだりなどもその好例だが、二千年を越える星霜をへて、なおその瑞々しく、^{みずみず}ヴィヴィドであるのは、まことの驚異である。引用個所には、マントヴァを流れるミンキウス川（現ミンチオ Mincio）が出てくるから、これは詩人の故郷の光景なのであろう。さて問題はメリポエウスであるが、ダブニスはどう言う「おーい、君の山羊は心配ないよ、子山羊らもな」。第一歌で泣く泣く山羊の群と別れを告げたメルポエウス。しかし今度は山羊たちは無事安穩彼の手元にとどまるのである。気をもむことは何もないのだ。「もし手がぬけるなら、木蔭で一息いれたまえ」。かつて木蔭に心置きなく憩えたのはティテュルスだけだった。父祖の地をあわただしく去らねばならない彼には、一切の閑暇は拒まれていた。だが今ようやく一服することが可能となったのだ。たとえ貧しくとも（乳離れした子羊たちを柵の中に入れてくれるアルキッペもピュリスもない）ひとまず仕事を中断して歌合戦を見物するぐらいの余裕はある。この彼は第一歌のメリポエウスとは別人であるかもしれない。おそらくはそうだろう。でもメリポエウスはやはりメリポエウスだ。彼にもまた、しばしの閑暇を与えたウエルギリウスの温潤玉の如き心を、あるいは深謀遠慮を思うべきである。ちなみに第七歌の制作時期は、Budé 版 *Bucolique* の E.de サン・ドニ Saint-Denis によれば、決定不可能ということらしい。⁽¹⁵⁾

IV

アマリュリス

女性にも一人ふれておきたい。アマリュリスという、清らかでうるわしい名前の持主である。第一歌冒頭から当該部分と書写すと、

…… tu, Tityre, lentus in umbra
 formosam resonare doces Amaryllida silvas.

……ティテュルス、君は木蔭に憩い
 森に教えている「美しいアマリュリス」と木魂を響かせるように。

アマリュリスは、きらめく、輝く等の意のギリシャ語 ἀμαρύσσω に由来する。
 テオクリトス『エイデュツリア』Ⅲ、1～2に。

κωμάσδω ποτὶ τὰν Ἀμαρυλλίδα, ταὶ δὲ αἴγες
 βόσκονται κατ' ὄρος, καὶ ὁ Τίτυρος αὐτὰς ἐλαύνει.

アマリュリスのもとへ思いのたけを歌いに行こう、
 丘で草を食む山羊たちはティテュロスが面倒を見てくれよう。⁽¹⁶⁾

とあり、すでに彼女はティテュルスの名と共に登場する。もともと、ローマの詩人にとっては、彼女がティテュルスの恋人乃至妻であるのに対し、シチリアの詩人においては二人の間にいささかの関わりもないのだが。『エイデュツリア』でさらに、Ⅲ、6とⅣ、38で二度「すてきなアマリュリス」χαρίεσσ' Ἀμαρυλλίと呼びかけられる彼女は、総じてテオクリトスにおいては、牧人たちの憧憬の対象、愛らしく魅力的だが少々移り気な娘、といったイメージを与える。しかし『牧歌』第一歌の formosa Amaryllis は、美しくかつ貞淑な女性である。ティテュルスは彼女を新しい伴侶とするようになってようやく、いささかの金子を蓄え、念願の自由を手に入れることができた。

namque, fatebor enim, dum me Galatea tenebat,
 nec spes libertatis erat nec cura peculi.

まったく正直言って、ガラテアの尻にしかかれていた時は、
自由の望みはなかったし、金をためることもできなかった。

ローマに出かけた不在の思い人を一途に恋慕う純情可憐なアマリュリス。

Mirabar, quid maesta deos, Amarylli, vocares;
cui pendere sua patereris in arbore poma:
Tityrus hinc aberat.

変だと思っていたよアマリュリス、なぜ君が悲しそうに神々を呼ぶのか。
誰のためにリンゴを枝に残しておいたのか、
ティテュルスがいなくなったのだ。

詩の最後で、連れ合いの旅立つ友を招くために食卓を整えたのも、おそらくアマリュリスであろう。

美しく、やさしく、まるで貞女の鑑のようなこうした女性像は、以後しかし意外な展開を見せる。第二歌の、アレクシスへの思いが一向に叶わないユリュドンは、以前の恋人の、

Nonne fuit satius, tristis Amanyllidis iras
atque superba pati fastidia...

アマリュリスの癩癪や高慢ちきを我慢したほうが
まだましだったか…

と嘆き、また三歌のダモエタスは、歌合戦の二行詩で、こう歌う。

Triste lupus stabulis, maturis frugibus imbres,

arboribus venti, nobis Amaryllidis irae.

恐ろしいのは家畜に狼，実りの作物に雨，

木には風，僕にはアマリュリスの剣幕。

ヒステリックで驕慢な女。同じアマリュリスという奇麗な名前をいただきながら，何故これほど相反する性格を与えられなければならなかったのか，もうひとつよくわからない。

八歌には，魔術を使って心変りした男を取り戻そうとするアルペシボエウスの，従順な助手の役廻りでアマリュリスが登場する。何故彼女の名がアマリュリスでなければいけないのか，これもよくわからない。とはいえ，第一歌の美しい彼女は，同歌と同様土地没収事件を背景とした九歌で，チラッともう一度顔を見せてくれる。

cum te ad delicias ferres Amaryllida nostras

あなたが我らのいとしいアマリュリスを訪れた時

あなた，とはここでは詩人自身の面影を何程かは宿したメナルカス。幾分かはウェルギリウス自身でもある一歌のティテュルスがアマリュリスを愛したように，メナルカスも彼女に思いを寄せるのであるが，一点違いがあるようだ。一歌の女性が美しくかつ貞淑であるのに対し，nostra「我らの」，delicia「魅力的な，おしゃれな，肉感的な」と言われる，九歌で一瞬姿を見せる彼女は，「コケティッシュで，すてきで，移り気な乙女」という，アマリュリスという言葉が喚起するイメージとより合致するように思われるが，どうだろうか。

註(1) Dante Alighieri, Divina Commedia, Inferno II, 58 訳は山川丙三郎(岩波文庫)

(2) 『ヨーロッパ文学評論集』みすず書房，1991，P.18 訳文を少々改めた。

(3) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房，1971，P.275 「このささやかな詩をそらんじて

いない者」の原文は、*der dieses kleine Gedicht nicht in Kopf hat*。「そらんじて云々」は少々訳しすぎのように思えるが、そのままにした。ちなみに Jean Bréjoux の仏訳では、*qui n'a pas présent à l'esprit ce petit poème*.

- (4) 原文の引用は、Tusculum 叢書による。Georgica, Aeneis に関しても同じ。以下すべて同様。訳文はすべて拙訳を用いた。
- (5) 『イリアス』松平千秋訳、岩波文庫
- (6) 『オデュッセイア』同上
- (7) R. Coleman, *Tityrus and Meliboeus, Greece and Rome*, 1966, P.79-97
- (8) W. Clausen, *Eclogues*, Oxford, 1994, P.33
- (9) J. Perret, *Bucoliques*, Presses universitaires de France, 1970, P.18
- (10) *Servii Grammatici qui feruntur in Vergilii carmina commentarii*, Vol.III, Georg Olms, 1986, P.4
- (11) R. Coleman, *Eclogues*, Cambridge, 1977, P.71
- (12) R. Hunter, *A selection Idylls*, Cambridge, 1999, P.111
- (13) A. Gide, *Romans, recits et sotie*, Pléiade, 1958, P.91
- (14) 訳は阿部良雄による。『ボードレール全集 I 悪の華』筑摩書房, 1983
- (15) E. de Saint-Deris, *Bncoliques*, Les belles lettres, 1967, P.7
- (16) 註12の P.39。訳は拙訳。